

## 編集後記

編集後記を記すに当たり、最初にご寄稿頂きました安西塾長始め歴代部長先生、師範、各一貫校柔道部長の先生方、柔友会役員の皆様、サブサークル幹事の方々、各代主将主務諸氏に、厚く御礼申し上げます。素晴らしいお祝いの言葉、これからの柔道部に対する期待、柔道部の思い出、等々が散りばめられたこの柔友会報特集号も、お陰様で中身の濃い内容となりました。

柔道部創立125周年の準備は昨春、瀧澤緑郎先輩（S41）を実行委員長とする柔友会委員会が行うこととなり、会計チーム（小林俊介チーフ）、式典チーム（熊谷喜隆チーフ）、記念品チーム（渡辺弘二チーフ）と共に、記録チームがスタートしました。私、龍野廣道（S46）以下、對馬好一（S51）、塩山英介（S51）、小林俊二（H01）、尾崎透（S56）、武田昇（H04）、加賀美行彦（H04）、秋山康元（H07）の8名です。スタートと同時に、予算との関係が深いことから小林俊介（S46）、石本千明（H01）の2人にもレギュラー助っ人として、又、現役学生からは柴垣、衛藤の両君に参加してもらうこととなりました。予算のみならず、特に小林俊介君は先生方へのパイプ役として、石本君は柔友会ホームページとのリンクを図った記念誌作成に、骨を折ってもらいました。

記録チームのスタートは、体裁や中身の検討、予算見込み、などの打ち合わせから始まり、その後は、資料集めが主な作業となりました。試合記録を集められるだけ集めた後は、試合データの記入です。8人全員が均等に手分けしてパソコンへの打ち込み作業を行いました。このデータはそのまま柔友会のホームページに載せることから、並行して石本君が中心となってホームページ製作会社との打ち合わせも進行しました。単に記念誌を作るのみではなく、「今のうちにできるだけ記録をデジタル化して残す」ことが、記録チームのもう一つの目的だったからです。途中、對馬君がせっかく打ち込みが終わったばかりのフロッピー・データを誤って破壊し、彼の担当年度のデータは再度入力となったハプニングも懐かしい思い出です。

続いての山場は、先生・師範・歴代主将主務等への原稿依頼とその回収です。しかし、当初は原稿もお盆頃までに出揃う予定が、なかなか思うように集まらず、そうこうしている内にいつの間にか夏も終わり秋口になっていました。この段階で、小林俊二君が小林俊介君と先輩宅をお伺いしたり、又、資料収集のため合宿所の押入れをひっくり返したりと大活躍。それでも主将・主務の原稿集めは小林俊介君、對馬君、秋山君が中心となり、尾崎君からの後輩OBへの働きかけも功を奏し、年末にかけ徐々に揃ってきました。出来上がった125周年記念誌を読んでいただいておりますように、なかなか読ませる文も多く、読み応えのある記念誌になったと思っております。

いよいよまとめる段階になると、印刷業者と校正作業を一手に引き受けたのが秋山君です。尤も彼は、収集したデータの管理役もこなしており、記録収集、原稿依頼などでも人一倍の働きをしてくれました。勿論、各人それぞれが忙しい時間を割いて最大の貢献をしてくれました。塩山君は打ち合わせ終了間際に駆けつけ参加してくれたことも再三ありました。加賀美君は試合記録の入力フォーマットの作成や写真収集、武田君は記念誌の表紙のデザイン担当等々、各人がそれぞれの立場で最大の貢献をしてくれました。三田図書館保存の写真コピーなど学校との橋渡しに学生の協力は大きい助かりました。月に1度のペースでの打ち合わせ、いずれの分担も面倒な作業が伴った訳ですが、それらを忙しい時間を割いて請け負ってくれたメンバー全員に感謝しています。

日本の多くの現役ビジネスマンは欧米社会に比べ、仕事中心の生活が一般的で、家庭・地域・母校・趣味・ボランティアなど複数の世界を持っている人は少ないそうです。昨年、寒稽古に参加したというたまたまの縁で、柔友会報特別号編集の仕事を後輩OB達と一緒にやることとなりました。それから一年間、それこそ新しい仲間（チームメンバー）と日常のビジネスとは無縁の新しい仕事を通して、自分の世界が少し広がったような気がします。とても貴重な、そして、とても楽しい経験でした。柔道部時代を通して得た精神力や物の見方などは、我々にとって、社会に出てからの自分の血となり肉となっていると思います。この記念誌を手にした若いOBの人達が、あのときの歴史の1ページにいた自分を思い出し、過去への感謝と将来への自信を再確認出来ることを願っています。

記録チーム リーダー 龍野廣道（昭和46年卒）